

中近世の寺社参詣と壁書

峯岡知廣

はじめに

本稿は、中世から近世にかけて人々が旅に対してどのようなイメージや意識を持っていたのかを分析するものである。まずは、近世の旅についての研究史を整理しておく。

早くから、近世に参詣を行ったのは主に民衆であることは指摘されている。なかでも高橋敏氏は、将來家を仕切るであろう女性も旅人に含まれていたことから、見聞・体験による自己教育を行うものではないかと推測した¹。また、新城常三氏は、参詣は元來信仰・観光を兼ねるなど自由だったが、講や通過儀礼化し義務視された参詣もあつたとした²。さらに高橋陽一氏と田中智彦氏は、旅の基本的な目的は西国巡礼などの信仰であり、そこに他の寺社参詣や物見遊山・観光などの要素も含まれる経路が近世では一般的になると考察した³。

個別事例では、相模大山参詣に注目した原淳一郎氏が、参詣者には山頂への登拜を目的にした人とそうではない人の二種類が存在することを指摘した。加えて、特殊なルートを使う行動が近世の聖地巡礼の特徴であり、旅の聖性を維持していたという⁴。一方、和歌山観光に注目した佐藤顕氏は、和歌浦を訪れる人の多くは巡礼者であり、加太から四国への渡海が本格的に始まると旅人数が増加すること、また、現地の民衆は旅人の誘致に積極的であつたことを明らかにした⁵。

これらの研究によって、旅は近世になると関連施設や交通の整備・ルートの発展によって盛んに行われるようになることや、その主体は参詣を行う庶民であることが明らかになった。しかし、それらの研究は巡礼一連の動きをみるものが多い。例えば、高橋敏氏の研究は、伊豆地方での巡礼供養塔を史料に、村落構造からの巡礼者の実態について述べたものであるが、一地方の巡礼者の傾向がそのまま全国に当てはまるとは考えられにくい。

それに対して前田卓氏は、納札の調査による寺院での定点観測を行い旅人の増加時期や地域による傾向などを指摘し、全国的な巡礼者の実態を考察している⁶。しかし、巡礼札は参詣者が事前に準備していた物であり、用意していなかつた巡礼者が書いたと思われる壁書は対象とされていない。

もちろん、壁書そのものの研究がないわけではない。例えば、山岸常人氏は、墨書の位置から中世の仏堂が僧俗を問わない広汎な参詣と参籠行為を行う場になり世俗化していたことを指摘した⁷。また、三上喜孝氏は、仏堂墨書の多くは文字を書きなれない巡礼者が一六世紀から一七世紀に増加したことによって集中して書かれ、それには地域社会を超えた普遍性・類似性があることを明らかにした⁸。そのほか幡鎌一弘氏は、法華山一乗寺の巡礼札の調査において、墨書の上にも札が打ち付けられていることから、墨書の行為は納札と同じ信仰的意味を持っていると考察した⁹。

これらの研究で、仏堂の墨書は参詣者の実態を示す生の文字史料として用いられたが、その考察は一七世紀でとどまっている。先述のように、近世になる

と民衆の参詣・巡礼の旅には、信仰のほかに観光の意識が加えられてきたとされるが、その根拠は主として日記史料である。日記は書き手の主観により内容が左右されるという問題もあることから、一八世紀以降の壁書も視野に入れることで、中世から近世への旅に対する意識の変化はより正確に捉えられるのではなからうか。

そこで本稿では、参詣先での壁書を史料とする。壁書は寺社での定点観測が可能であり、年代や居所との距離などを数量データで示すこともできる。そのため日記よりも客観的に参詣者の情報を集めることができ、旅の目的意識など参詣者の実態をより俯瞰的にみることができると思われる。

分析にあたっては、比較のため、まずは中世の壁書の状態を把握することから始め、その後近世の壁書をみていく。また、西国三十三所など主な参詣地は西に集中しているため、西日本の寺社を中心に扱う。なお、壁書とは壁に書いた文字およびその内容のことであるが、参詣者は壁以外に柱や長押・戸の棧などにも書き付けているため、本稿では神社仏閣の建造物に書かれた文字を総称して壁書とする。

第一章 壁書の基本情報

幡鎌氏も引用する【図1】は、落書する西国三十三所巡礼者の姿を描いた一八世紀中ごろの禅画である。ここからは、人の手が届かないような高い位置には同行者を踏み台にして文字を書き付けていたことなど、当時の巡礼者の姿をうかがうことができる。また、このような絵柄があることから、巡礼者が壁書することは一般的に認知されていたと推測される。

壁書は、【図2】のように柱・壁・扉などに直接書き付けたものであり、なかには人の手が届かないような天井に書かれる場合もある。これらは先述の納札と同様の場所に書き付けられているため、同じ信仰・記念の意味があるとき

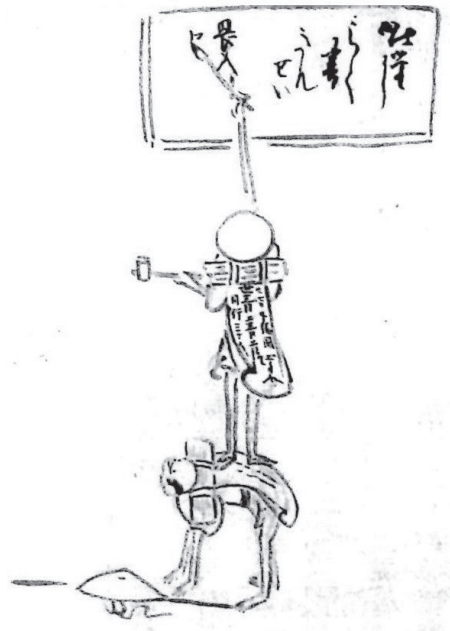
れている^⑩。

さて、本稿を執筆するにあたって、西日本を中心に建造物の解体修理報告書に史料として掲載されている壁書を可能な限り収集した。対象となる寺社は【表1】のとおり一八棟である。壁書は近現代のものを除き、全部で一六八点収集した。これによって、東は愛知県豊川市の三明寺本堂から西は熊本県球磨郡多良木町の青蓮寺阿弥陀堂まで、西日本を中心に広範囲にわたる建造物の情報を得ることができた。

収集した一六八点の壁書は、【表2】で年代順に整理している。中世の壁書は四七点、近世の壁書は五九点あり、最古の年代は永享二年（一四三〇）、最新は慶応元年（一八六五）のものである。これらに通し番号を付け、引用する場合は「1」と表記する。

壁書は、参詣者によって思い思いに書かれたようにみえるが、基本的な構成がある。実際に書かれた例を次にあげておく。

遠敷郡「たら庄村」高鳥「」吉：「文化十三_丙子：」正月十六日参り申し候「70」



【図1】白隠「巡礼落書図」（一部）
芳澤勝弘「白隠の巡礼落書図」（『禅文化』二〇四号、二〇〇七年）より引用。



【図2】浄土寺浄土堂 壁書

『国宝浄土寺浄土堂修理工事報告書』図版編（浄土寺浄土堂修理委員会、一九五九年）より引用。

【表1】本稿で扱う建造物

記号	建造物	所在地	壁書年代
A	浄土寺 浄土堂	兵庫県小野市浄谷町	1506 - 1891
B	朝光寺 本堂	兵庫県加東市	1428 - 1526
C	興福寺 東金堂	奈良県奈良市登大路町	1559
D	不動院 本堂	奈良県大和高田市本郷町	1570
E	正蓮寺 大日堂	奈良県橿原市小綱町	1470 - 1692
F	円成寺 本堂	奈良県奈良市忍辱山町	1493 - 1613
G	金剛寺 薬師堂	大阪府河内長野市天野町	1504
H	福勝寺 本堂	和歌山県海南市下津町	1512 - 1820
I	金峯山寺 本堂	奈良県吉野郡吉野町	1573 - 1591
J	般若寺 経蔵	奈良県奈良市般若寺町	1573 - 1576
K	三明寺 本堂内宮殿	愛知県豊川市豊川町	1578
L	当麻寺 薬師堂	奈良県葛城市	1581
M	吉野水分神社 拜殿	奈良県吉野郡吉野町	1663 - 1865
N	永保寺 開山堂	岐阜県多治見市虎溪山町	1672
O	青蓮寺 阿弥陀堂	熊本県球磨郡多良木町	1789 - 1832
P	出釈迦寺 本堂	香川県善通寺市	1793 - 1886
Q	飯盛寺 本堂	福井県小浜市	1816 - 1877
R	粉河寺 六角堂	和歌山県紀の川市	不明

註1) [R] は解体修理報告書で壁書の解説がされていないため年代が判明していないが、この建造物は1720年に建立されているため、書かれている壁書は近世のものであると判断できる。

註2) [M] は1604年、[P] は1790年に建立されているため、年月日が不明のものも近世の壁書であると判断できる。

番号	西暦	和暦	居所	名前・人数	記事	建造物
42	1573	元亀4年3月18日	甲州鶴之郡八村	周尊1人	南無阿弥陀仏	A
43	1573	元亀4年7月7日	九州肥後玉名郡野原庄小代	○(魚偏に宜)中光 同行3人	歌	J
44	1573 - 1591	天正	相州中郡さくら	—	16□□	I
45	1576	天正4年8月13日	□(総か紀か)州□	板倉次郎三郎 同道 金杉太郎四朗	西国一見見□□□	J
46	1578	天正6年…	高野山□大黒院□	—	(あらく) /このてら門 /さまこいし	K
47	1581	天正9年閏7月9日	長州萩津	—	此表一見□幸	L
48	1588	天正16年□1月	—	—	金□□□ん匂	I
49	1588	天正16年7月1□□	相州中郡	16人	順礼/村衆2人□之□□□	I
50	1603	慶824日	常陸	—	まかへ	A
51	1604	慶長9年大ひ日正月	—	—	—	E
52	1609	慶長14年5月□□日	—	乗□(毎の下に水)	旅の途中	F
53	1613	慶長18年	—	—	男色	F
54	1614	慶長20年5月12日	越前国北方	松崎刑部卿只1人	かた…	A
55	1615	慶長20年5月□1日	—	—	かた□…	A
56	1641	寛永18年10月6日	—	—(参詣者)	—(刻書)	H
57	1663	寛文3年5月朔日9ツ時	—	—	修行/祈祷	M
58	1672	寛文12年8月24日	尾州名古屋田町	幸若氏 一花心 羽根田氏 自笑	尾州名古屋恒豊一見之□ (刻書)	N
59	1714	正徳4年正月18日	—	—	能番組	M
60	1746	延享3年4月8日	—	伊保瓦重 長三	—	A
61	1774	安永3年4月5日	—	—	御陽行房致物也	M
62	1777	安永6年卯月21日	大坂曾根崎三丁目	薦屋新兵衛	参詣仕候/村田屋 懇意内	A
63	1782	天明2年4月18日	遠州秋葉山麓犬居□	尾浜武右工門 同行18叶	参候	A
64	1786	天明6年6月27日	赤穂上郡	梅川	参ル	A
65	1789	寛政元年8月9日	—	3人□/□□/□□/考典	参詣	O
66	1793	寛政正年4月12日	勢州津町(○に心)	14人	百人講	P
67	1797	寛政9年正月20日	播列	三木市右工門	—	A
68	1807	文化4年3月23日	武州足立郡塚越村	同行4人	—	A
69	1814	文化11年8月3日9ツ時	阿州阿波郡西ノ川村	武蔵	奉順礼西国三十三所霊	A
70	1816	文化13年正月16日	遠敷郡たら庄村	高鳥 [] …吉…	参詣	Q
71	1818	文化15年正月23日	—	—	—	A
72	1820	文政3年	—	—(参詣者)	—	H
73	1820	文政3年5月3日	同国印南郡中筋村	亀田定石衛門	此堂参詣仕候	A
74	1829	文政12年9月21日	酒見北条	あん□丁角蔵 かま□丁おきち おそで	—	A
75	1830 - 1843	天保 [] 4月	—	石井三…	—	P
76	1832	天保3年2月15日	大坂	瀧屋藤太郎	参詣	A
77	1832	天保3年…	—	—	2…	O

【表2】壁書一覧

番号	西暦	和暦	居所	名前・人数	記事	建造物
1	1430	永享2年	—	—	□/南無大悲観世音菩薩	B
2	1470	文明2年5月21日	—	—	花押	E
3	1493	明応2年4月14日・結日21日	—	—	南無阿弥陀仏	F
4	1493	明応2年	—	—	開山年/仏像安置年	F
5	1495	明応4年2月21日	—	栄助同衆	彼岸中参籠	F
6	1497	明応6年8月19日	—	栄助同衆	彼岸中参籠/9度参籠所願成就	F
7	1500	明応9年正月21日	—	山伏両法女人	諸国一見	F
8	1503	文亀3年6月27日	—	—	南無阿弥陀仏	F
9	1503	文亀3年8月	—	栄俊 栄順	彼岸中参籠	F
10	1504	永正元年卯月	—	—	南無…(貫欠)	G
11	1506	永正3年	当国印南群□村	—	南無阿弥陀仏	A
12	1508	永正5年2月17日	—	2人	17日参籠	F
13	1512	永正9年5月16日	—	—	—	H
14	1513	永正10年8月13日	—	—	彼岸	F
15	1514	永正11年8月吉日	—	—	—	H
16	1514	永正11年8月□日	—	善円	併御仏意相者…	F
17	1515	永正12年5月4日	—	—(参詣者)	—	H
18	1515	永正12年3月24日	—	22人	—	F
19	1515	永正12年潤2月7日	—	宗禅入道	17日参籠	F
20	1516	永正13年9月11日	—	円海 藤徳	17ヶ日参籠	F
21	1527	大永7年	役人専光坊	少式 大学	—	A
22	1527	大永7年	—	—	—	A
23	1529	享禄2年	—	純意	南無阿弥陀仏	A
24	1529	享禄2年3月18日	—	—	—	A
25	1533	天文2年4月12日	明鏡坊	宝寿	—	A
26	1537	天文6年4月5日	当国明石郡江井郷	教観	西国時始而道伴	A
27	1544	天文13年8月2日…	—	同□(行)2人	西国一見	A
28	1544	天文13年8月15日	九州筑前□□住人	石津弥六衛門	西国卅三所巡礼	A
29	1552	天文21年7月14日	与州	菱田…	—	A
30	1555	天文24年7月5日亥剋	—	—	—	A
31	1555	天文24年7月	常陸さ竹	田所弥三郎	—	A
32	1557	弘治3年6月吉日	—	—(修験者)	奉修求聞持虚空蔵法	H
33	1559	永禄2年卯月12日より	—	同行3人	当行始行新立	C
34	1560	永禄3年	—	—(修験者)	—	H
35	1563	永禄6年7月5日	—	—	—	A
36	1563	永禄6年	—	—	—	A
37	1566	永禄9年5月5日	—	—	歌/草木成仏	F
38	1566	永禄9年8月3日	—	—	—	E
39	1569	永禄12年	—	—	(奉修求聞持虚空蔵法)	H
40	1570	元亀元年6月	—	—(修験者)	—	H
41	1570	元亀元	—	—	男色	D

番号	西暦	和暦	居所	名前・人数	記事	建造物
115	—	—	—	三郎	西国一見伊せうに赤蓮寺せん	A
116	—	—	駿河国田中衆	5人	—	A
117	—	—	下総野田…	—	—	A
118	—	—	—	5人	西国卅三巡礼	A
119	—	—	賀古	さ川大郎兵衛	参宮申、吉野、多武峯 高野 粉河 根来 尾張 国熱田	A
120	—	—	美作	本位田右衛門亮	当寺一見之事、兩三度に て候、近比珍重存候	A
121	—	—	信州佐久野沢	永仁	内山円良…	A
122	—	—	和州	—	—	A
123	—	—	野州ひこ間	—	—	A
124	—	—	常州	—	—	A
125	—	—	相州国府	—	—	A
126	—	—	上総国真行寺真福寺	空相	—	A
127	—	—	常州	小田	—	A
128	—	—	長岡	少弐1人	—	A
129	—	—	雲州国	六郎	—	A
130	—	—	—	—	南無…	B
131	—	—	—	—	鹿野山/朝光寺	B
132	—	—	—	—	南…	B
133	—	—	—	—	南無大…	B
134	—	—	—	—	願以比功德	B
135	—	—	—	—	奉念誦般若心經1500卷敬 白	B
136	—	—	—	—	南無阿弥陀仏	F
137	—	—	—	—	不明	F
138	—	—	—	—	南無阿弥陀仏	F
139	—	—	—	—	男色	F
140	—	—	—	—	歌	F
141	—	—	—	栄助	17ヶ日参籠	F
142	—	—	—	—	彼岸日参籠	F
143	—	—	—	3人	4度参籠	F
144	—	—	—	—	男色	F
145	—	—	—	空剛	大乘妙典/かたみの歌	F
146	—	—	—	—	歌	F
147	—	—	—	—	南無阿弥陀仏	F
148	—	—	真□坊	沙門 妙水	当寺知恩院/諸国一見/男 色	F
149	—	—	—	—	歌	F
150	—	—	—	—	歌か	F
151	—	—	—	—	歌	F
152	—	—	高野山	— (僧)	言得意即身成仏/御まふ り有之	G
153	—	—	—	—	歌	G

番号	西暦	和暦	居所	名前・人数	記事	建造物
78	1832	天保3…	—	—	—	O
79	1836	天保7年3月吉日明九ツ半□	播州姫路西二階町	富屋店善助 同行3人	—	P
80	1839 — 1843	天保1〔 〕18日	北越蒲原郡弥彦石□ 村	松□伊… 同行…	—	P
81	1842	天保13年正月…	—	—	—	P
82	1847	弘化4年	備前児島阿津村	源三郎	—	P
83	1851	嘉永4年5月5日	但馬養父十二所村	同行兩人	参詣	A
84	1864	元治元年7月19日	—	荒鹿（清）一	京都長州守に付… 若州様(者)片原御箇(メ)	Q
85	1865	慶応元年9月22日	—	—	—	M
86	—	丑ノ8月15日	備中賀陽郡長良村	前田官左衛門	—	P
87	—	卯5月11日	塩本尻	幸治郎	廻	P
88	—	未2月2日	伊予松山和気郡古唐 村	同行9人	廻り	P
89	—	亥4月17日	備中下津井	□□善介 他4名	八…	P
90	—	亥4月19日9ツ時	阿州徳島新魚町	魚屋幸吉	—	P
91	—	亥の8月21日	—	—	寄進	F
92	—	2月11日	阿州板野郡才田村	田中善太郎	—	P
93	—	5月23日	—	—	大国行順	A
94	—	6月2日	—	—	7日参籠	F
95	—	7月6日	さ竹太田	—	—	A
96	—	7月19日	久下田	木村四、(郎) 六兵衛	—	I
97	—	7月19日	ひこら さくら	うへの新べ□	—	I
98	—	—	江戸白金5丁目	3人	—	P
99	—	—	備中西阿知	—	仙表…	P
100	—	—	備前鹿忍	—	□八	P
101	—	—	備中 玉嶋□小路	井幸 外4名	—	P
102	—	—	備中倉…	—	—	P
103	—	—	大坂〔 〕横〔 〕 津各郡□り	—	—	P
104	—	—	紀州若山…	—	—	P
105	—	—	阿波国板野郡御所村	笠井… 他4名	—	P
106	—	—	大坂□難波…	—	—	P
107	—	—	備前国児島郡…	—	—	P
108	—	—	備中松山	— (商人)	綿岩中伝●((□に庄) 三鶴	P
109	—	—	—	—	八十八	P
110	—	—	土州	—	—	P
111	—	—	水戸…	—	—	P
112	—	—	—	—	修行	M
113	—	—	常陸	みやけ新二郎	—	A
114	—	—	出羽長井	—	—	A

番号	西暦	和暦	居所	名前・人数	記事	建造物
154	—	—	寶笠寺	—	不明	G
155	—	—	—	—	不明	G
156	—	—	—	— (修験者)	—	H
157	—	—	□波	—	—	J
158	—	—	□なかさき西□□ (長崎か)	—	—	J
159	—	—	伊勢国あのお津 西来寺	僧 同行□	(中間切断) …代所仕候 仍而	J
160	—	—	—	才人 さきち	助うち…	K
161	—	—	遠州…	不明	男色	K
162	—	—	—	同行5人	男色	K
163	—	—	下さ川郷 長三	与八	— (刻書)	N
164	—	—	甲賀郡野田村	小山平右衛門	—	N
165	—	—	—	長右衛門 など	—	N
166	—	—	—	—	お□寺に…/御坊ハ全蔵 (二)て(候)	Q
167	—	—	—	—	…飯盛寺見渡す	Q
168	—	—	—	—	加斗飯盛寺法海…	Q

註1) この表は以下を参考に作成した。

『国宝浄土寺浄土堂修理工事報告書』(本文編)(図版編) 浄土寺浄土堂修理委員会、1959年

『小野市史』第四巻史料編I、小野市史編纂専門委員会、1997年

文化財建造物保存技術協会『国宝朝光寺本堂修理工事報告書』朝光寺、2012年

『国宝興福寺東金堂修理工事報告書』国宝興福寺東金堂修理工事事務所、1940年

『重要文化財不動院本堂修理工事報告書』奈良県文化財保存事務所、1967年

『重要文化財正蓮寺大日堂修理工事報告書』奈良県教育委員会文化財保存課、1957年

『重要文化財円成寺本堂及楼門修理工事報告書』奈良県教育委員会事務局文化財保存課、1961年

建築研究協会編『大阪府指定有形文化財金剛寺薬師堂五仏堂五仏堂渡廊保存修理工事報告書』天野山金剛寺、2004年

和歌山県文化財センター編『重要文化財福勝寺本堂・求聞持堂修理工事報告書』福勝寺、2008年

奈良県文化財保存事務所編『国宝金峯山寺本堂修理工事報告書』奈良県教育委員会、1984年

奈良県文化財保存事務所編『重要文化財般若寺経蔵修理工事報告書』奈良県教育委員会、1973年

県指定文化財建造物三明寺本堂修理委員会『愛知県指定文化財建造物三明寺本堂保存修理工事報告書』三明寺、2006年

奈良県文化財保存事務所編『重要文化財当麻寺薬師堂修理工事報告書』奈良県教育委員会、1978年

奈良県文化財保存事務所編『重要文化財吉野水分神社拝殿幣殿修理工事報告書』奈良県教育委員会、1975年

文化財建造物保存技術協会編『国宝永保寺開山堂及び観音堂保存修理工事報告書』永保寺、2012年

文化財建造物保存技術協会編『重要文化財青蓮寺阿弥陀堂保存修理工事報告書』青蓮寺、1996年

香川県政策部文化技術局文化振興課『四国八十八ヶ所霊場第七十三番札所出釈迦寺調査報告書』香川県、2018年

文化財建造物保存技術協会編『重要文化財飯盛寺本堂修理工事報告書』飯盛寺、1998年

和歌山県文化財センター編『名勝粉河寺庭園粉河寺六角堂史跡名勝建造物緊急修復事業概報』粉河寺、1996年

註2) 建造物は表1の記号と対応している。

天保三辰二月十五日参詣」大阪住人瀧屋藤太郎〔76〕

このように壁書は、順序が入れ替わることや一部が記載されない場合もあるが、基本的には日付・居所・名前（人数）・記事の四項目で構成されている。そのため、使用する壁書史料はこの四項目に分解して表に掲載している。なお記事は、そのまま掲載するが、長文のものは主な内容を判断し「歌」「南無阿弥陀仏」のように略記している。

身分については、書き付けた人物の名前をもとに僧・俗人・複数人に分類した。俗人は、そのなかでもさらに苗字を持っている人物・苗字を持っていない人物・屋号を持っている商人の三種類に分類している。

天保七申三月吉日明九ツ半□ 播州姫路西二階町 富屋店善助 同行三人
〔79〕

また、右のように身分が判断できる名前とその同行者の名前や人数が書かれている場合には、俗人と複数人の両方の項目に分類している。
記事の視点からは、三上氏の研究を参考に信仰・観光・歌の三種類に分類した。

南無阿弥陀佛」当国印南郡□村」永正三年〔11〕

同国印南郡中筋村亀田定石衛門」文政三辰五月三日此堂参詣仕候〔73〕

まず信仰には、右のように「参詣」や「南無阿弥陀仏」「参籠」などの宗教的な行為や言葉の記述がみられる記事を分類している。

西国一見」同□二人 天文十三年八月二日…〔27〕

次に観光には、右のような宗教的な記述とと思われる内容が書かれている記事を分類した。これらは信仰の記事とは異なり、寺社への参詣が主目的ではない旅人の記述と思われる。そのため、先行研究で信仰と異なるもう一つの目的として挙げられていた観光と分類名をつけた。

あらゝ御ゆかしの」五郎殿や」元亀元々〔41〕

また、右のように美少年に対する思いを書いた男色の記事もみられる。男色は、後述する「かたミかたミ」のように共通した「あらゝ恋しや」のフレーズが書かれることが多く、仏堂墨書の特徴の一つを表すものとして評価されている^①。記事の内容としては、信仰目的とは考えられにくいため、観光目的の記事に分類する。

山里爾うきよいと王ん夏もかな」くやくすきしむかしには候らん〔140〕

大乘妙典 かきおくもそてこそぬれもし□□□」ら□□」な可らんあとの」
可たみともなれ」空剛〔145〕

三つ目の歌は、右のように歌が含まれる記事を分類する。歌を書き付けることは、参詣の記念や呪文的な意味を持つとされている^②。なかには作者不明にもかかわらず全国で共通して書き付けられる歌もある。これは三上氏によって「かたみの歌」と名付けられ、「書きおくもかたみとなれや筆のあと我はいづくの土となるらん」を大まかな形として、所々変形されながら落書で全国に広まっ

た歌とされている。変形は歌だけでなく、「かたミかたミ」という壁書の定型句としても使われた。⁽¹³⁾ 今回収集した壁書の中にも同様の記事がみられたため、分類項目の一つとした。

小括

壁書には書き付ける基本項目があることから、身分別や記事の内容別に分類することができた。また対象とする地域は、東は愛知県から西は熊本県まで西日本を中心に広範囲にわたる。網羅的に収集したとは言いがたいが、かたよりなく分析することができると思われる。

第二章 中世の壁書

第一節 参詣者

本章では、中世の壁書について、それを書いた人物・内容・目的を分析し、その特質をみる。

中世における壁書を記した人物を一覧にした【表3】のなかでは、僧の分類項目が特徴的である。すなわち、俗人の壁書が四点であるのに対して、僧の事例は一点もある。

天文二年四月十二日「明鏡坊 宝寿」〔25〕

上総国真行寺真福寺常住空相〔126〕

また、居所の記述では、右のように自らの所属する寺の地名・寺名を記す場合があり、個人の旅ではなく寺の用事として、もしくはその旅の途中で立ち寄った人の記述とみることができる。記録に残っている中世の僧の旅には、使者と

【表3】中世の参詣者

分類	番号	名前
僧	7	山伏両法女人
	9	栄俊 栄順
	16	善円
	19	宗禅入道
	20	円海 藤徳
	21	少弐 大学
	23	純意
	25	宝寿
	26	教観
	42	周尊1人
俗人	46	—
	28	石津弥六衛門
	29	菱田…
	31	田所弥三郎
45	板倉次郎三郎 同道 金杉太郎四朗	

して東大寺から尼崎へ下向する旅や自分の寺と関係のある寺院を訪ねてまわる旅などがあり、⁽¹⁴⁾ 壁書を書いた僧もこのような旅をしていたと思われる。

第二節 信仰目的の記事

中世の壁書のうち、「南無阿弥陀仏」「南無大悲観世音菩薩」のように「南無」と書かれた記事は七点あり「1・3・8・10・11・23・42」、それ以外の一点と合わせて「5・6・9・12・14・19・20・26・28・32・39」、信仰目的のものは一八点ある。僧の壁書にも書かれていた「南無阿弥陀仏」は、阿弥陀仏の浄土に救済されることを願って唱えられた、阿弥陀仏信仰に関する参詣の記事である。また、「南無大悲観世音菩薩」は観世音菩薩信仰で唱えられる語であることから、同様に参詣の記事である。

次に、「彼岸中参籠」「十七日参籠」といった参籠の記述が六点ある「5・6・9・12・19・20」。寺社に参詣する際に行われる参籠は、日数を限って世間との交際を絶ち、礼拝・誦経などの宗教生活を送る行為である。⁽¹⁵⁾ 彼岸の七日間や、一七日間参籠していたことがうかがえる。さらに、「奉修求聞持虚空藏法」の記事が二点あり、密教の記憶力増進法「虚空藏求聞持法」を行った形跡と思

われる「32・39」。

そして、「西国三十三所巡礼」「西国時始而道伴」という西国三十三所巡礼についての記事が二点みられる「26・28」。西国三十三所巡礼は、観音菩薩が衆生救済のために三三種類の化身となって現れることに基づいて、平安時代末期に起こった風習である。また、その巡礼は、観世音菩薩像を安置する三三か所の霊場を巡拝し、観音の功德にあずかることを願い行われている。書き付けられた浄土寺浄土堂は西国三十三所の札所ではないが、巡礼の間に立ち寄ったことがうかがえる。

このように中世参詣の記事には、参籠や巡礼などの参詣者が行った行動が細かく記載されている。そのため、これらの記事を書き記した参詣者は、寺社に参詣していることや三十三所巡礼を行っているという自分の行為に対しての自負の意識が高いと思われる。したがって、その意識を持つ参詣者の旅は、寺社への参詣が主目的の信仰の旅であつたのではないだろうか。

第三節 観光目的の記事

中世における観光目的と判断できる記事の壁書は五点ある。「西国一見」や「諸国一見」など「一見」という言葉を使用したものが四点「7・27・45・47」、男色の記事が一点確認できた「41」。一見は一度見るといふ意味の言葉であり、寺へ参詣する目的だけではなく、西国のさまざまなものを見ることを主目的とした、観光の旅で訪れた参詣者による壁書であると思われる。この記事が中世の日付でみられることから、中世から観光を目的とした旅が行われていたことがわかる。

また、西国は畿内からみて西の国、すなわち中国・四国・九州地方を指す言葉であるが、鎌倉時代からは東国の人々が畿内近国も含めて使うことがあつた。¹⁶「西国一見」の記事が書かれている建造物は、兵庫県の浄土寺浄土堂と奈良県の般若寺経蔵である「27・45」。どちらも本来西国には含まれないが、東

国の人々が使用する西国の範囲には入っている。

それに対して、参詣地よりも西に位置する山口県から奈良県の当麻寺薬師堂へ参詣した人物は「此表一見□幸」と書き記しており、「西国」という言葉を使用していない「47」。このことから、東国からの旅人のみが使用していた言葉であると推測される。また、「西国」の記事が兵庫県と奈良県の離れた位置の建造物で同じように書かれているため、東国からの旅行が定着していることも読み取れるのではないだろうか。さらに、観光目的の記述で使われる「一見」と合わせて使用されていることから、「西国」が観光地として捉えられていたことも見受けられる。ただし地名としてではなく、「西国三十三所巡礼」という宗教用語になると九州からの参詣者も使用している「28」。これは、西国巡礼が定着していたことを意味する。

そして、近畿や西側からの参詣者は「諸国一見」や「此表一見」などの言葉を使用していたことも判明した。そのため、居所が記載されていなくても「一見」の記事から大まかな参詣者の居所を予測できる。例えば「45」は、般若寺経蔵に書き付けられた壁書で、報告書では居所がはっきりと解説されず「□（総か紀か）州」となっていた。しかし、記事には「西国一見□□□□」と、「西国一見」の言葉が書かれている。先述したように「西国」は東からの旅人のみが使用していた言葉であると推測されることから、畿内周辺の紀州ではなく、東日本総州からの参詣者であると判断できる。

小括

中世の壁書には、寺に用事で来た僧の名前が多くみられた。また、参詣者による神仏の効果を期待する記事が多く、信仰の旅が多く行われていたようである。しかし、観光を目的とした旅もされており、壁書には観光目的であることを「一見」という言葉を用いてはつきりと記載されていた。その記事は参詣者の居所によって変わり、東国からの参詣者は「西国一見」を、畿内近国や西国

からの参詣者は「諸国一見」などの言葉を使うことが判明した。

第三章 近世の壁書

第一節 参詣者

本章では、近世の壁書について、それを書いた人物・内容・目的を分析し、その特質をみる。

俗人の壁書数が中世では四点であったのに対し、近世の参詣者を一覧にした【表4】では二五点に増加していることが目立つ。先行研究により、近世の寺社参詣は俗人によって盛んに行われていたことが明らかにされていたが、壁書でもその傾向をみることが出来る。

俗人は、第一章で述べたように三種類に分類している。まず、苗字を持つている人物の壁書は、中世では四点であったが、近世になると一五点になり増加している。そして、苗字のない人物と商人の壁書は、近世のみにみられる。苗字なしは延享三年（一七四六）の壁書が初見で五点あり、商人は安永六年（一七七七）が初見で五点ある。

江戸時代には、庶民が公的な場で苗字を名乗ることが禁止されていた。しかし、私的には苗字を持つものが少なくなく、村の中や庶民の間では使用していた。¹⁷ そのため、ほとんどの庶民に私的な苗字があったが、壁書では思いのほか苗字のないものも多くみられる。このことから、壁書に苗字を書くか書かないかははっきりと決まっておらず、個人の感覚によって決められていたと考えられる。おそらく、壁書は人に見られる公的なものであると同時に、ひそかに書かれた私的なものであるため、このような差が出てくるのではないだろうか。そして、この公的か私的かという感覚は、壁書を他人に見てほしい、あるいは見てほしくない、もしくは同じような壁書をする立場の人のみにひそかに見てほしいといった壁書に対する考え方と重なると思われる。

また、複数人で参詣した記事も中世より増加しており、人数も二・三人から九人や一六人など、大勢の人々が連れだつて参詣していた様子がうかがえる【49・88】。

第二節 信仰目的の記事

近世の壁書のうち、「参詣」や「参る」と書かれた記事が八点あり【62・63・64・65・70・73・76・83】、それ以外の八点とあわせて【49・57・66・69・87・88・109・112】、信仰目的のものは一六点ある。参詣とは、神仏におまわりに行く行為を表す言葉であり、近世以前から使用されている。しかし、同じく参詣がおこなわれていたであろう中世の壁書にはみられず、安永六年（一七七七）のものが初見であることから、近世より参詣者のなかで使用され始めた言葉であることがわかる【62】。

それに対して、中世の壁書で多くみられた「南無阿弥陀仏」の記事は書かれなくなる。同じく中世の壁書でみられた「西国三十三所巡礼」「参籠」などの宗教行為の記事は、四点のみである【49・57・69・112】。西国三十三所巡礼は近世でも盛んに行われていたため、参詣者が減少しているとは考えられにくい。そのため、「参詣」は「南無阿弥陀仏」「西国三十三所巡礼」が変化した記事で、似たような意味合いで使われたものではないだろうか。

しかし、巡礼は巡るという文字が入っているように、宗教上の目的から複数の寺社を訪ねてまわる行動を示す。複数の寺を訪れるのは、旅程のなかでも大部分を占めることになり、出発時から旅の主目的として決められていたと想定される。一方、参詣は寺社を訪れる行為のみを指し、一つの寺社を訪れるだけでも成立すると思われる。巡礼よりも簡単に行うことができ、寺社への参詣以外を主目的とした観光の途中で立ち寄ることも可能である。そのため、「参詣」が信仰目的の旅による壁書であるとは断定できない。

次に、「百人講」の記事が一点ある【66】。講は同じ目的を持った人々で構成

【表4】近世の参詣者

分類	番号	名前
僧	52	乗□（毎の下に水）
俗人 （苗字あり）	54	松崎刑部卿只1人
	58	幸若氏 一花心 羽根田氏 自笑
	63	尾浜武右エ門
	64	梅川
	67	三木市右エ門
	70	高鳥□…吉…
	73	亀田定石衛門
	75	石井三…
	84	荒鹿（清）一
	86	前田官左衛門
	89	□□善介 他4名
	92	田中善太郎
	96	木村四ノ（郎） 六兵衛
	97	うへの新ベ□
	105	笠井… 他4名
俗人 （苗字なし）	60	伊保瓦重 長三
	69	武蔵
	74	あん□丁角蔵 かま□丁おきち おそで
	82	源三郎
	87	幸治郎
俗人 （商人）	62	葛屋新兵衛
	76	瀧屋藤太郎
	79	富屋店善助 同行3人
	90	魚屋幸吉
	108	一（商人）

された組織であり、近世には参詣のために作られた組織が存在した。ここでは頼母子講式に旅費を積み立て、講の代表者を順番に送り出す代参形式が多く行われていた。⁽¹⁸⁾ そのため、「百人講」は代参者の記事と思われる。さらに、参詣した葛屋新兵衛が仲のよい村田屋にも参詣の御利益があるように名前を書き連ねた代参の事例もみられる「62」。

また、「廻り」「八十八」という記事が香川県にある出釈迦寺本堂の壁書に三点みられる「87・88・109」。廻りは、ぐるりと巡る意味であることから、中世の壁書で使われていた「巡礼」と意味が近いと思われる。「八十八」は四国八十八所のことであろうから、「西国三十三所巡礼」と同様の記事であると推測され、出釈迦寺の壁書は近世でありながら中世の壁書のような信仰を目的とした性質を持っている。ここまでみてきた事例とはやや異なるが、この寺が四国八十八所の札所の一つであることから、八十八所巡り特有の言葉なのではないだろうか。

第三節 観光目的の記事

中世にも観光目的の旅は行われており、壁書には「西国一見」など「一見」という言葉を用いた記事が書かれていた。近世の旅は、先行研究によると観光目的の旅が増加するとされている。しかし、近世の年号の壁書では「一見」を用いた記事は、永保寺開山堂に刻まれた寛文一二年（一六七二）の一点にかみられない「58」。また、その他に観光目的の記事と捉えられる記事は、男色の一点のみである「53」。

そこで、先ほど観光目的の旅でも行うことができるかと推測した「参詣」の記事をみる。中世に比べて近世の記事が増加しているのは、この「参詣」の記事のみであり、中世では一点もみられなかったが、近世には八点に増加している。観光目的の旅が増加していることから、同じように増加しているこの記事が観光目的の記事になるのではないかと思われる。しかし、参詣は先ほど意味を述べたように寺を訪れることを表すので、表面的には信仰を目的とした旅の参詣者による壁書にみえる。

そのため、近世の観光を目的とした旅人は、「一見」と素直に観光であることを記述せずに、「参詣」という信仰目的に見せかける言葉を使用していたのではないだろうか。そして、それが信仰関係の記事一六のうち八点と半数を占めていることから、「参詣」という言葉は観光目的を美化する用語として広く使用されていたと思われる。

小括

近世には俗人の参詣者が増え、観光を主目的とする旅が増えたが、素直にそのこと

を記述するのではなく、「参詣」という美化する言葉を使うようになっていたことが浮かび上がってきた。また、庶民が名前を書く際に苗字を使用するかどうかは、個人の感覚により判断されたようなので、壁書は他人に見られる公的なものでもあり、秘められた私的なものでもあったことがわかる。参詣者の増加に伴い、他人に見られる機会が増加したが、美化する用語が使われるようになった要因の一つになるのではないだろうか。

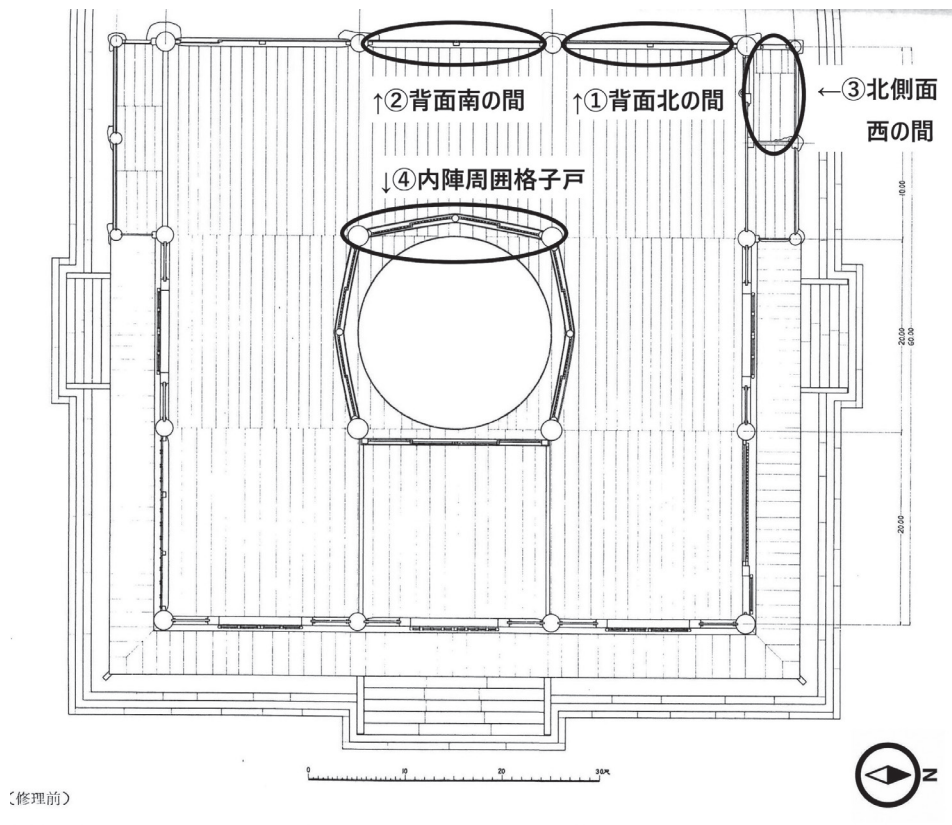
第四章 壁書を記した参詣者の意識

第一節 壁書の位置

本章では、建造物内における壁書の位置や参詣者の居所と参詣地との距離など、記事以外の視点から壁書を分析する。

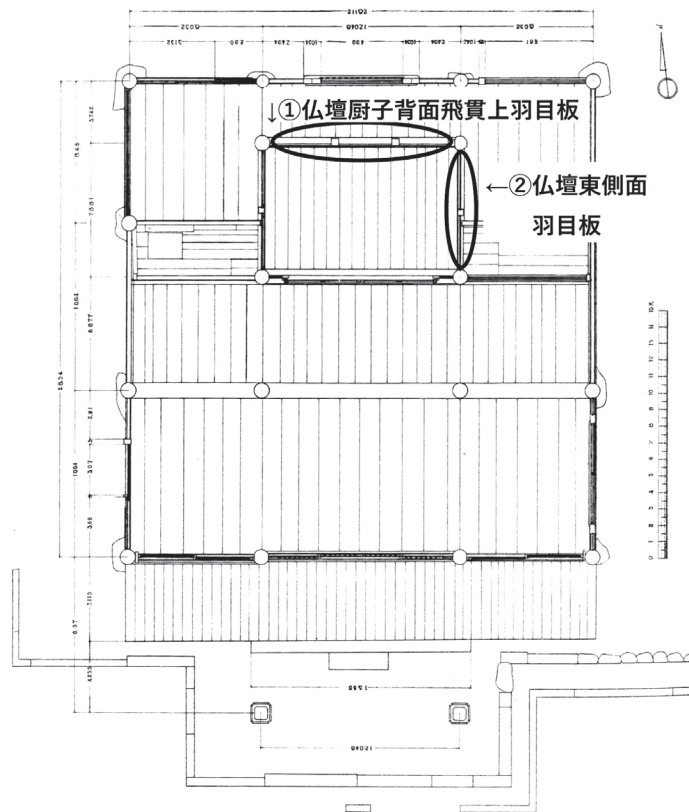
壁書は参詣者によって思い思いの場所に書き付けられているため、その壁書の大まかな位置を【図3】のように平面図上に表示していく。位置が複数ある場合は番号を振り分けており、本文中では「①」のように引用する。例として【図3】は浄土寺浄土堂、【図4】は正蓮寺大日堂、【図5】は青蓮寺阿弥陀堂の平面図を挙げている。図面の向きは方角でそろえるのではなく、石段の位置などから参詣者が主に出入りするであろうと思われる扉を正面出入口として判断し、それが画面下部になるようにそろえている。

また、寺院の仏堂建築物は、共通の空間構成を持っている¹⁹⁾。中世仏堂の空間構成の一般的な特徴は、柱の列や壁で内部が大きく前後に二分されていることにある。前半部分は礼堂または外陣と呼ばれ、正面出入口から入ってすぐの間が主にそう呼ばれる。後半部分は本尊の安置される内陣と呼ばれ、堂内の奥まった所になる。内陣内部の須弥壇部分がさらに区切られている場合には内々陣と呼ぶこともある。本稿でも、寺院の建築物ではそれにならいう堂内を区別し、内陣・外陣の用語を使用する。



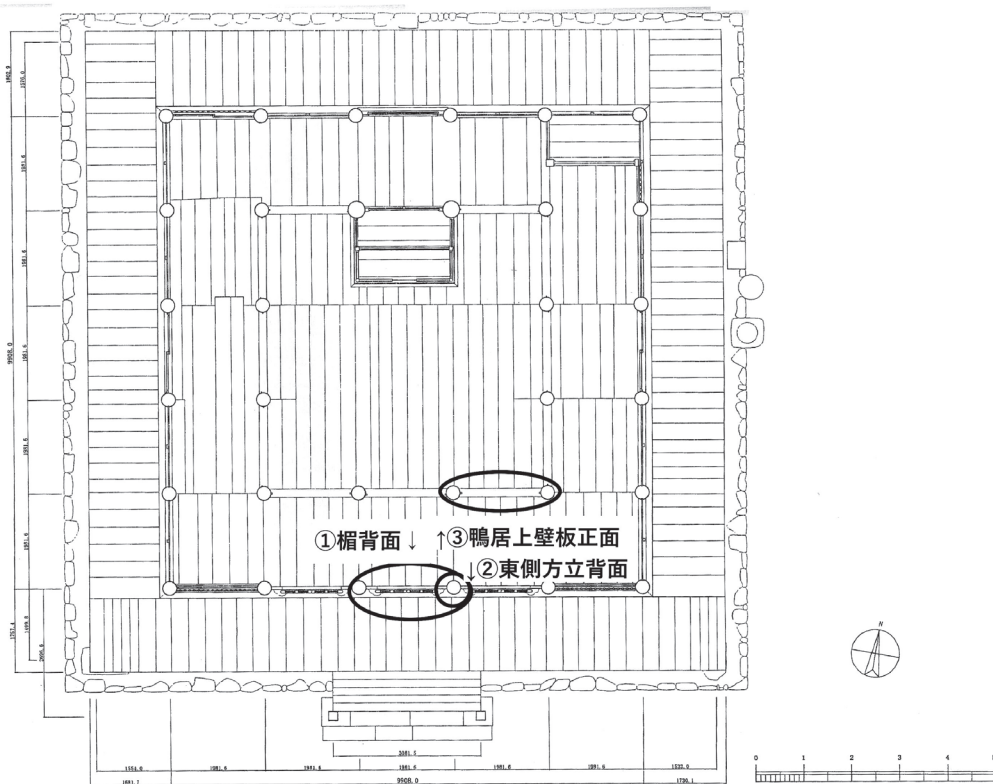
【図3】 浄土寺浄土堂 壁書位置

『国宝浄土寺浄土堂修理工事報告書』図版編（浄土寺浄土堂修理委員会、一九五九年）より引用・加筆。



【図4】正蓮寺大日堂 壁書位置

『重要文化財正蓮寺大日堂修理工事報告書』（奈良県教育委員会文化財保存課、一九五七年）より引用・加筆。



【図5】青蓮寺阿弥陀堂 壁書位置

文化財建造物保存技術協会編『重要文化財青蓮寺阿弥陀堂保存修理工事報告書』（青蓮寺、一九九六年）より引用・加筆。

一八棟の建造物のなかでまず、永正三年（一五〇六）から嘉永四年（一八五二）まで幅広い年代の壁書が残されている浄土寺浄土堂に注目する〔11・83〕。一二世紀に建立された浄土堂の内部〔図3〕は、北側と南側に小部屋があるものの、主に一つの大部屋のみで構成されており、中央の壇上に阿弥陀三尊像が安置されている。仏像の周囲は格子戸が取り囲み、その内部を内陣としている。仏像は東を向くように置かれ、堂の東側が正面入り口となっている。壁書は、中世は主に仏堂内の奥、仏像の背面にあたる壁に書かれていた〔①・②〕。しかし、近世になると、壁書は内陣周辺の格子戸に書かれるようになっていく〔④〕。浄土堂の内陣は仏堂の中央部分にあり、参詣者はその周辺を容易に動き回ることができる。そのため、内陣周辺に書く壁書は他の参詣者の目に付きやすくなる。そのような壁書を残した近世参詣者の行動は、中世参詣者に比べて大胆になっていると読み取れる。

浄土寺において、中世と近世の参詣者の行動の違いがあったが、それ以外の建造物では中世と近世の壁書の位置に違いがみられるのか。浄土寺以外の建造物は、書かれていた壁書の年代をみると、大まかに中世の壁書が多い建造物と近世の壁書が多い建造物に区別することができた。そのため、中世壁書の建造物と近世壁書の建造物に分類し、壁書の位置の違いをみていく。なお、金剛寺薬師堂は柱材に書き付けられていたが小屋東に再利用されている。ゆえに本来の書き付けられていた位置が不明であるため、対象外とする。

中世の壁書がある建造物の興福寺東金堂・円成寺本堂・般若寺経蔵は、建造物の正面出入口から一番離れた奥の壁や部屋に壁書がなされている。また、朝光寺本堂は内陣の出入口側に壁書があるが、外陣が広く距離で考えると他の建造物の奥部にあたる位置になる。不動院本堂・正蓮寺大日堂〔図4〕・当麻寺薬師堂は、内陣となる仏壇の後方や側面の壁板に書かれている。福勝寺本堂は、外陣にのみ参詣者の壁書が残されている。福勝寺は文化年間（一八〇四―一八）の改修工事が行われるまで、外陣と内陣の境目が区切られていた。その

ため、参詣者は外陣から内陣に入り込むことができず、その場で壁書していたと思われる。金峯山寺本堂・三明寺本堂内宮殿では、建造物の床下に潜りこんで書かれている。よって、中世の壁書は建造物内の奥まった所、人目につきにくい所に書かれていることが多いように思われる。

近世壁書の建造物の出釈迦寺本堂・粉河寺六角堂は、外壁や外陣内に壁書がされ、出釈迦寺では墨書の目立つ白壁にも壁書がされている。永保寺開山堂・飯盛寺本堂・青蓮寺阿弥陀堂〔図5〕も、同じく外陣の柱や内陣の出入口近くに壁書が残されている。吉野水分神社拝殿では、建造物の出入口近くに書かれているが、奥にも壁書がある。神社の例はこの建造物のため、別の傾向があるのかもしれない。以上の例から、近世の壁書は建造物内もしくは部屋に入っただけで視界に入りそうな位置にあることが多いと思われる。

兵庫県の浄土寺でみられた壁書の位置の中世と近世の傾向が、他の建造物でも同じようにみられた。本稿で対象とする建造物は、愛知県から熊本県まで広く分布している。そのため、広範囲で同じ傾向があることが認められた。このことから、近世の参詣者が人目につきやすい場所に壁書を残す大胆な行動をとるようになる傾向は、西日本全般のものであると推測する。そして、このような大胆な行動をとる人物は、信仰を主目的とした参詣者ではなく、観光目的の旅で寺社を訪れた参詣者であると思われる。この点からも近世の参詣目的が観光に変化していたことがうかがえる。

第二節 参詣地と居所の距離

参詣者は、その建造物を訪れた日付と自らの名前に加えて居所を書き記していた。居所は、名前だけの情報では同姓同名の人物と間違われる可能性があるため、書いた本人を特定する要素として記載された項目である。三上氏はそれによって神仏に対して自分自身の存在を特定させ、神仏の加護を受けることができる²⁰⁾と考えられていたのではないかとしている。

【表5】居所との距離

中世				
距離	番号	居所	参詣先	記事
100km圏内	11	播磨	播磨	南無阿弥陀仏
	26	播磨	播磨	西国時始而道伴
200km圏内	21	伊勢	播磨	—
	46	紀伊	三河	(あらく) このてら門 さまこいし
300km圏内	—	—	—	—
400km圏内	28	筑前	播磨	西国卅三所巡礼
	42	甲斐	播磨	南無阿弥陀仏
	45	上総・下総	大和	西国一見見□□□
	47	長門	大和	此表一見□幸
500km圏内	31	常陸	播磨	—
500km以上	43	肥後	大和	(歌)
近世				
距離	番号	居所	参詣先	記事
100km圏内	58	尾張	美濃	尾州名古屋恒豊一見之□
	62	大阪	播磨	参詣仕候/村田屋 懇意内
	64	播磨	播磨	参ル
	67	播磨	播磨	—
	69	阿波	播磨	奉順礼西国三十三所霊
	70	若狭	若狭	参詣
	73	播磨	播磨	此堂参詣仕候
	74	播磨	播磨	—
	76	大阪	播磨	参詣
	82	備前	讃岐	—
	83	但馬	播磨	参詣
	86	備中	讃岐	—
	88	伊予	讃岐	廻り
	89	備中	讃岐	八…
	90	阿波	讃岐	—
	92	阿波	讃岐	—
	99	備中	讃岐	仙表…
	100	備前	讃岐	□八
	101	備中	讃岐	—
	102	備中	讃岐	—
105	阿波	讃岐	—	
107	備前	讃岐	—	
108	備中	讃岐	綿岩中伝● ((□に庄) 三鶴	
110	土佐	讃岐	—	
200km圏内	54	越前	播磨	かた…
	79	播磨	讃岐	—
	103	大坂	讃岐	—
	104	紀伊	讃岐	—
	106	大坂	讃岐	—
300km圏内	44	相模	大和	16□□
	49	相模	大和	順礼/村衆2人□之□□□
	63	遠江	播磨	参候
	66	伊勢	讃岐	百人講
400km圏内	96	下野	大和	—
500km圏内	50	常陸	播磨	まかへ
	68	武蔵	播磨	—
500km以上	80	越後	讃岐	—
	98	江戸	讃岐	—
	111	水戸	讃岐	—

【表5】では、参詣地の建造物と壁書に書かれた参詣者の居所の間の直線距離を100kmごとに分類した。その結果、中世では仕事として旅をしていた僧だけでなく、遠く離れた土地から参詣している俗人の名前もみえた。そのなかには「西国卅三所巡礼」という巡礼目的の記事や、「西国一見」という観光目的の記事がみられる。また、近世でも400km以上の距離がある参詣が行われている。

そのほか、注目すべき点として、居所と参詣地との距離が400km以上になると、ほぼ記事のない簡素な壁書しかみられない。壁書を残すことは、参詣先の神仏と縁が結ばれることを期待する信仰のため、もしくは自身がこの場所に来たことを記念したものであった²¹。それは、神仏や自分よりも後に来た他の参詣者など、誰かに見られることも考えて書き付けられていたと考えられる。そのため、日付や名前に加えて「西国卅三所巡礼」のような旅の目的などの記事で自身の行為を書き記した壁書の方が、より信仰に意欲的な参詣を示す記述であると思われる。さらに、それを書き付けた参詣者は、その行為に対して熱心な信仰心を持つ人物であるに違いない。それに対して、記事のない壁書は日付や居所のみの簡略的なものであり、書き残すことの効果はあまり期待していない。つまり、信仰の目的意識が低い壁書と捉えることができる。このことから、遠隔地からの参詣は信仰の意識よりも観光の意識が強かったと推測される。

小括

壁書を記事の内容以外の観点からみると、書かれていた位置では、中世には建造物内の奥まった場所に書き付けられていた。しかし、近世には出入口付近など人目につく場所に書かれており、近世になると参詣者が大胆な行動をとるようになる傾向をうかがうことができた。

参詣地と参詣者の居所との距離では、壁書の記事の有無から参詣者の意識を推測した。その結果、400km以上の離れた遠隔地からの旅になると、中世で

も近世でも参詣者は信仰の意識が低い参詣を行っていたことが判明した。

おわりに

本稿では、中世から近世にかけての寺社参詣に人々がどのような意識を持っていたのかを、参詣先に書き付けられていた壁書から明らかにしようとした。その結果、壁書に使われた言葉や書き付けられた位置に参詣者の意識が表れていることが確認できた。中世から信仰目的と観光目的の参詣は行われており、その意識は記事の言葉から明確に判断することができた。しかし、近世になると表面的には信仰目的に捉えられるような、観光目的を美化する用語を参詣者が使うようになっていた。さらに壁書の位置なども併せて分析し、中世から変化した、建前上は信仰目的としている近世の人々の参詣意識をうかがうことができた。

個々の分析のまとめは各章の末尾を参照していただくとして、ここでは壁書を史料として用いることによって、従来の旅日記を使用した研究の欠をいかに補うことができたかを整理しておきたい。

参詣者の意識については、旅の行動ルートから考察されていたが、参詣者が壁書に使用した言葉から考察することができた。まず、旅の目的が中世から近世なるにつれて、信仰から観光に変化していたことは個別の事例で知られていたが、「南無阿弥陀仏」「一見」などの記事からそれを数量データで示すことができた。そして、先行研究では中世における明確な観光の事例は指摘されていなかったが、「一見」の記事からすでに観光が比較的行われていたことが新たに判明した。さらに、近世の旅人が参詣を表向き目的としていたのは知られていたが、壁書に使用される言葉が「一見」から「参詣」に変化していることがわかり、より明確になった。

参詣地から定点観測することによって、参詣者の居所による違いが比較でき

るようになった点も大きい。例えば、「西国」の語意も地域によって違いがあることが判明した。また、居所と参詣地との距離から、遠隔地からの旅は中世でも近世でも信仰の意識が低い参詣が行われていたこともうかがえた。

そして、壁書の位置から、旅日記では読み取れない参詣先の建造物内での行動を考察することができた。参詣地での行動は、言葉のように取り繕えない無意識に近いものであると思われる。また、壁書は私的な苗字を使うような秘められたものでもあったため、日記に記すよりも本心に近い意識をみる事ができるのではないか。

しかし、本稿では収集の対象とする建築物を主に西日本に絞っていた。そのため、東日本あるいは全国の建築物に残された壁書を研究の対象とすることで、より当時の寺社参詣における人々の意識を知ることができるのではないだろうか。また、歌は読み手の感情が込められているものであるが、過去に詠まれた歌が引用されたものや御詠歌・「かたみの歌」のように参詣に伴い形式的に詠われる歌もある。そのため、信仰目的・観光目的などの分類に当てはめることが難しく、本稿ではこれらの壁書を取り上げることができなかった。読み解くことができれば参詣者の意識をより具体的に明らかにすることができると思う。さらに、第三章第二節で取り上げた「廻り」「八十八」のフレーズが四国巡礼特有の言葉になるのかどうかは、四国八十八所寺院の壁書を集めることで明らかになると思われる。

本稿を執筆するにあたって、多くの報告書を閲覧したが、壁書が存在しても史料として掲載されていない場合がしばしば見られた。現状、壁書が発見されたとしても落書きとしてしか認識されない場合もあるのである。今後、壁書が史料としてより積極的に扱われるようになれば幸いである。

註

(1) 高橋敏「民衆の旅―巡礼供養塔からみた旅の教育・文化史的意義―」(真野俊和編

『講座日本の巡礼』第三巻 巡礼の構造と地方巡礼、雄山閣出版、一九九六年、初出一九七八年。

(2) 新城常三「参詣と民衆生活」(同『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』塙書房、一九八二年)。

(3) 高橋陽一「多様化する近世の旅―道中日記にみる東北人の上方旅行―」(同『近世旅行史の研究―信仰・観光の旅と旅行地域・温泉―』清文堂、二〇一六年、初出二〇一一年)。田中智彦「聖地を巡る人と旅」(岩田書院、二〇〇四年)。

(4) 原淳一郎「参詣と巡礼」(同『近世社寺参詣の研究』思文閣出版、二〇〇七年)。

(5) 佐藤顕「旅日記にみる近世の和歌山観光」(『和歌山市史研究』第四〇号、二〇一二年)。

(6) 前田卓「江戸時代の巡礼の動き」(同『巡礼の社会学』ミネルヴァ書房、一九七一年)。

(7) 山岸常人「中世後期の仏堂の世俗的機能」(同『中世寺院の僧団・法会・文書』東京大学出版会、二〇〇四年、初出一九九九年)。

(8) 三上喜孝「中近世の仏堂墨書と地域社会―天童市若松寺観音堂墨書の調査をふまえて―」(『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』第六号、二〇〇九年)。

(9) 幡鎌一弘「巡礼札からみる西国巡礼の信仰形態―天井に打ちつけられた信仰心―」(『天理大学おやさと研究所年報』第二六号、二〇〇九年)。

(10) 前掲註(9) 幡鎌論文。

(11) 前掲註(8) 三上論文。

(12) 三上喜孝『落書きに歴史をよむ』(吉川弘文館、二〇一四年) 七〇頁。

(13) 前掲註(12) 三上著書一〇六頁。

(14) 大村拓生「戦国期に奈良から尼崎を旅した僧侶たちの記録」(『地域史研究・尼崎市史研究紀要』第一一三号、二〇一三年)。小島道裕「中世後期の旅と消費」(『永禄六年北国下り遣足帳』の支出と場」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第一一三集、二〇〇四年)。

(15) 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第六卷(吉川弘文館、一九八五年)。

(16) 前掲註(15)。

(17) 坂田聡「苗字と名前の歴史」(吉川弘文館、二〇〇六年) 四二頁。豊田武「苗字の歴史」(吉川弘文館、二〇一二年) 一五七頁。

(18) 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第五卷(吉川弘文館、一九八五年)。

(19) 前掲註(7) 山岸論文。

(20) 前掲註(12) 三上著書二二五頁。

(21) 前掲註(12) 三上著書二二三頁。

〔謝辞〕 本稿は、平成三〇年度に大阪大谷大学へ提出した卒業論文を修正したものです。卒業論文の作成から本稿の修正まで指導してくださった、馬部隆弘先生には大変お世話になりました。厚く御礼を申し上げます、感謝の意を表します。